

今回初めて審査員として参加させて頂き、日本のダンスの現場で作品がどのように評価付けされているのかを体験させてもらった。未だ定まらない評価基準だが、何をどのように評価していくのが、今後の日本のコンテンポラリーダンスの向かう先を決定していくのだと、大きな責任を実感する審査会であった。

以下は応募者全員と関係者へのメッセージになります。

審査員として評価基準を熟考し、自分なりに誠実に審査させて頂いたつもりであります。しかしそれは今年のダンコレの審査基準でしかなく、ダンスの全てを評価したものでないということを理解して頂きたい。時代、世代、国、文化が変われば、また異なった評価基準になるでしょう。

受賞された方は、この受賞を今後のご自身の活動にどのように繋げていくかが重要であります。受賞を足がかりに大きく飛び立ってもらい、皆さんの活動によって賞そのものの価値を更に高いものにして頂きたい。

また受賞とならなかった全ての応募者の皆さんは、今後もご自身の創作を追求して頂き、審査員の評価基準を覆すような、審査員を成長させるような作品を創ってもらいたいと思います。作品が社会を成長させ、作品が新しい時代を築いていくのです。

梅田宏明

(振付家、ダンサー、ビジュアルアーティスト、横浜赤レンガ倉庫 1 号館振付家)

ファイナリストが 10 組から 8 組に変更され、ベトナムの 1 組が辞退して出場は 7 組。日本の 5 組は演劇的作品から観念的作品まで多彩で、シーンの多極化を示した。10 年来協働し、舞台芸術を問い直す小野彩加／中澤陽は、ダンスの快楽を生むあらゆる可能性を中断するハイテンションな非-ダンスで受賞し、在仏レジデンスの権利を得た。ドイツ拠点の四戸賢治は、巧みさゆえに独自の毒が弱まったが現代的な問題系を編集し見せた。小倉笑は、身体が空間を満たすオブジェの多義性と戯れる独特のドラマティックなダンスを提案し、寺杣彩はダンサーの個性を生かしていびつさが魅力的なユートピアを作り上げた。池上楓子／中村たからは、技術の影に隠れがちな内容の深まりに期待している。

審査員賞の台湾のリュウ・イリンは、装飾を排したスリリングな動きの応酬と緻密な構成が観客を引き込み、真摯なメッセージを伝えた。シンガポールのファイルル・ザイヒドは新鮮な振付の語彙を駆使して、社会慣習に対峙する人間の強さを描いた。

方法の違いはあれ、どの作品も言説に切り刻まれ、現実の世界で地歩を失いつつある身体が復権を叫ぶ気配を感じた。動き、音、美術、ことばを突き抜ける、作家性の強いダンスを待っている。

岡見さえ

(舞踊評論家、共立女子大学文芸学部准教授)

審査員という役割で、他者の評価基準にも触れて意見をぶつけ合う時間には、異なる視点から体験・共有されることこそ、“ダンス” 足り得る条件なのではないか、とすら感じる豊かさがあつた。

上演当日は、振付、構成、演出、踊りそのものに、独創性や質の高さ、“つくること” への真剣さや挑戦的な姿勢がどのように舞台上にあらわれるのか、など、あれこれと評価基準を準備しつつも、それらを吹っ飛ばしてくれるような“ダンス” という現象に出会いたい、という、ある種矛盾した期待が膨らむ。

ファイナリストとして上演された作品は、生まれた先から消滅していく身体の現象を、他者の体験や記憶に関わる“ダンス” へと変えていく力を持つものだった。中でも、静謐な振付と高い技術に支えられた繊細かつ、鋭利なムーブメントから、言語化できない身体ドラマ（感覚のドラマ）が滲み出てくるリュウ・インの作品と、“タスク” のような所作の中に、強い身体の個性や物質性が浮き彫りになってくる小野彩加／中澤陽の作品には、振付・演出家と出演者の密度の高い対話や作業の積み重ねを感じ、ズシリと体感にきた。総評としては、甲乙つけ難く、異なる基準でそれぞれが上手い、という印象が強かった。という中で、“ダンス” という現象を見る視点の振れ幅が、ランダムな方向に大きく乱れるような、驚きに満ちた体験を期待したい。

北村明子

(振付家、ダンサー、信州大学人文学部教授)

毎年ダンスコレクションの審査の時期 12 月が来ると、世界を想い、ダンスを想い、創作者を想い様々な景色がめぐる。今年はやっとう海外という遠方からもチームで来てくれた。(ベトナムは残念!) そのことがまず嬉しい。「ダンスコレクション」という名の通り今回の上演は「コレクション感」はあつた。趣味や嗜好が確実に違うその上での 審査会である。「だから面白い!」とも言える。

本番当日は昔も今も緊張感が求められる「大切な場」であるが、みな美しくこなしていく。すごいなと思う。ある意味淡々と 20 分間の本番時間が流れていく。観ていてなにかが不足している感じもする。なぜか以前の方が「背景を背負っている」「時代を思う」おおげさに言うなら「国を背負っている」を感じたが、今は、そこが薄く感じる。ダンスという行動があまりにちまたのものになってしまったのだろうか。なんて思い浮かべてしまう。若き振付家でありダンスを志す者たちにとって希望や夢を語る場であってほしい。そんな風に思う。映像審査でも興味のもてるものは色々あつた、赤レンガでの上演も寺杣彩さんや四戸賢治さんなど語りかけていた。小倉笑さんの希望も観た。これからもダンスコレクション全体を応援したい。

近藤良平

(コンドルズ主宰・振付家・ダンサー・彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督)

今年は何より海外からのファイナリストの出演が叶ったことを素直に嬉しく思います。この2年、映像参加であっても海外からのエントリーを受け続けた横浜ダンスコレクション、そして作品を作り続けているアーティストたちに敬意を表します。審査員賞となったリュウ・イリンさんの振付はミニマルな流れの中での関係の変化に引き込まれました。今回はデュオが多くなりましたがどの作品も関係や組み合わせの妙を楽しませてくれました。池上楓子／中村たからさん、小倉笑さんの作品からはどちらもユニークさの伸び代を感じ今後がとても楽しみです。寺杣彩さんの作品はコンセプトの明確さが魅力的でそれをジャンプ台にさらに想像もつかない場所に連れて行ってくれることを期待します。四戸賢治さんは欧州で活動する姿が日本で見られる楽しさと完成度も高い上演でした。最後にもう一捻り混乱か圧倒できる可能性も感じました。ファイルル・ザイヒドさんはテーマと身体の力強さが素晴らしく、特にテーマの扱い方は日本のアーティストが吸収できる部分だと思います。小野彩加／中澤陽さんは新しい文脈への挑戦を感じ、実験によるその先をとても期待しています。グエン・ヅウ・タインさんの辞退によりソロ作品の上演がなかったのは残念でしたが、人や身体の距離や関係に敏感な今、そして今後も、複数の身体の作品を見ることで考えられることはあるのだと思います。

多田淳之介

(演出家、東京デスロック主宰)

海外からの参加者がようやく映像ではなく実際に見られるようになったことが何よりも喜ばしい。まだ決して多いとは言えないけれども、海外のフェスティバルのディレクターたちもふたたび横浜に顔を見せるようになった。台湾から来たリュウ・イリン『... and, or...』は、男女2人の関係性を探究する完成度の高いデュエットで、女性ダンサーChou Ai-Hsuanの魅力も大きい。シンガポールのファイルル・ザイヒドの『So-PAN』は、シンガポールの女性の歴史とコンテンポラリーダンスとの交響。本人の辞退により、ベトナムのグヴェン・ヅウィ・タインの特異な身体性を実際に見ることが叶わなかったのは残念でならない。

徹底してコンセプチュアルな作りの小野彩加／中澤陽『バランス』は、一見ポスト・モダンダンスの残響とも見えるが、それだけに収まらない新しい何かをも感じさせる。その萌芽を今後も注視したい。見るたびに振付のスタイルがカメレオンのように変化する四戸賢治はその器用さが今回も印象的。小倉笑『M2』は、従来のコンテンポラリーダンスの外側から突然闖入してきたエイリアンのような面白さ。ほかの作品もぜひ見てみたい。

浜野文雄

(新書館「ダンスマガジン」編集委員)

ヨコハマダンスコレクションは、日本のダンスシーンにおいてまぎれもなく重要な取り組みである。新進のアーティストを発掘することが世代を更新するためには必要不可欠であるからだ。国内外のプロフェッショナルが集う、若き才能の発見の場であることは間違いない。

若いクリエイターを紹介するこのコンペティションというプラットフォームと、ダンス公演のプログラムを比較することで、一般の観客は視野を広げることができる。「イベント」という側面は人々を集め、ダンスをよりよく知らしめることに貢献している。

在日フランス大使館とともに審査員を務めたことで、私は受賞者の選考にとどまらず、日本におけるダンスの芸術的発展の現在地についてより深く理解することができた。ダンサーたちの技術的・芸術的レベルの高さと、パフォーマンス的な次元への関心の高さを知ることとなった。

2022年の大使館賞受賞者は、2024年にフランス国立ダンスセンターでレジデンスを行う予定だ。今から彼らのアプローチを知ること、しっかり準備ができ、然るべきアーティストたちと引き合わせることができるだろう。

カトリーヌ・ティケニス
(フランス国立ダンスセンター (CND) 総合ディレクター)